

当事者にとっての被災者像に関する研究

11H2089 本間明子

1. 本研究の目的

本研究の目的は、震災に直面した当事者にとって「被災者像」とはどのようなものかを明らかにすることである。外部社会は震災で被災した人々に対して「被災者らしさ」を求めがちであるが、当事者はそうした典型的な被災者像に抗おうとしていることが先行研究では指摘されている(野田：1995、高森・諏訪：2014)。しかし当事者による「被災者像」のとらえ方や、「被災者」としての位置づけ方について十分検討している研究は少ない。そこで本研究では、当事者の語りから、彼ら彼女らのなかで「被災者像」がどのようにつくられていくのか、また自分自身が被災者のなかでどのように位置づけられていくのかを明らかにした。さらに、ハーマンスの「対話的自己」論を参照しながら、自分自身の被災者の中での位置づけ方が、震災の乗り越えにどう関わるのかについて考察を行った。

2. 方法

方法として、東日本大震災で津波の被害を受けた岩手県九戸郡野田村の住民に聞き取りを行った。野田村は、岩手県の北東部、北上山地の沿岸部に位置している。北部および西部は久慈市、南部は普代村および岩泉町に接し、東部は太平洋に面している。人口は2010年10月現在で4632人、高齢化率は30.1%である。東日本大震災では震度5弱の揺れ、津波水位16.4m、遡上最高到達点37.8mの津波に襲われた。死者38人(うち村内死亡者28人)、負傷者17人、行方不明者は2011年3月末にゼロになっている。住宅被害は512棟、内訳は流出または全壊309棟、大規模半壊136棟、半壊33棟、一部損壊34棟である。

本研究に協力して下さったのは住民の男性3名、女性7名、計10名である。年齢は60代~80代に偏ってはいるが、震災についての多様な話を聞くことができた。調査期間は2014年4月から8月である。聞き取り場所はインフォーマント自宅、公共施設を利用し、聞き取り時間は1時間~2時間半程度だった。また、月に1回行われている弘前大学ボランティアセンターの支援・交流活動や、2014年8月に行われた「愛宕神社例大祭野田まつり」にボランティアとして参加し、インフォーマルな聞き取りも行った。聞き取りの内容を録音した音声データからトランスクリプトを作成し、語りの内容をもとに分析を行った。

聞き取りの方法は非構造化インタビューとし、質問項目はあらかじめ設定しなかった。その理由は二つある。第一に、時期や内容にこだわらず震災についての多様な話を聞くためである。第二に、震災の経験のなかで話したくないことや話すのが辛いこともあると考えられるため、自分の話したいことを話せる範囲で自由に話すことができるように質問項目を設定しなかった。

3. 結果

ここからは、聞き取りからわかったことを述べていく。まず、被災した人々の経験は多様であり、震災について語る場を設けられたときに何についてどのように語るのかということは、それぞれ異なっていた。語りの内容として、たとえば、支援してくれた人への感謝の気持ちを中心に語る人、自分の経験に対する考え方を語る人、自宅への思いを語る人などがいた。一口に「被災者」と言っても、それぞれの経験は多様であり、ひとくくりにすることはできないといえる。

では、被災した当事者にとっての「被災者像」とはどのようなものだろうか。被災者の体験が多様であることを踏まえたうえで、当事者にとっての「被災者像」についてまとめたところ、語りのなかで参照している「他者」が当事者にとっての「被災者」となっていることがわかった。さらに、その「他者」の存在によって、自分の「被災者」としての位置づけをすることができていることも明らかになった。具体的には、三つの事例を挙げることができる。まずは、自分より被害の大きい「他者」を参照している事例である。自分より被害の大きかった沿岸地域の人と自分を比較することで、自分を被災者のなかでも「いい方」「幸せ」だと位置づけていた。次に、仮設住宅に住む「他者」を参照しながら語っている事例である。仮設住宅に住んでいる人とそうではない自分の暮らしを比較することで、自分の「被災者」としての位置づけを確保していた。また、過去の自分を「他者」のように参照している事例があった。震災のあと何も考えることができなかつた過去の自分と今の自分を比較することで、今の自分の思いや考え方についてより明確に語るができている。三者の共通点として、当事者が語りのなかで参照している「他者」は、自分と全く異なる経験をした存在としてとらえられているのではないことが挙げられる。「他者」についてのまなざしには、同じときに自分と同じように震災を経験したという思いがこめられている。「他者」を参照することによって自分の「被災者」としての位置づけを知ることができるという意味で、被災者にとって「他者」は重要な存在だといえる。以上が、語りの分析からわかったことである。

4. 考察

ここからは、「他者」を参照して語ることと震災の乗り越えがどのように関わっているのかについて考察していく。ハーマンスによれば、語られるものとしての物語は「単純に永遠に固定化された孤立した出来事の連鎖」ではなく、「出来事は柔軟に組織される」ものである(ハーマンス & ケンペン 2006 : 41)。本研究でいえば、「被災者」としての自分の位置づけや「震災」という経験への意味づけは、語りのなかで柔軟に組織されていくものだといえる。そのときに、語りのなかで構成的に現れる「他者」という存在によって、自分にとっての「被災者像」が生成され、自分の「被災者」としての位置づけもなされる。自分の経験を「語る」という行為は、これまで被災体験や喪失の研究において指摘されているように、それ自体が当事者にとって大きな意味を持つものである(野田 : 1992)。それは、誰かに話すことで自分の気持ちを知ってもらうことができるのはもちろん、「語る」という行為によって自分の経験に意味づけがされていくからである。そして、本研究からわかった当事者が参照している「他者」の存在について考えると、「語

る」という行為自体が大きな意味を持つことに加えて、「他者」の存在が震災の乗り越えにおいて重要だといえる。「他者」を参照することによって自分の「被災者」としての位置づけをすることができ、「他者」に自分を投影しながら語ることで自分の経験は相対化される。本研究ではこの過程を震災の乗り越えと考える。

ハーマンズの「対話的自己」という概念は、自己を多数の I ポジションと考え、そのポジション間には移動や支配性が存在するというものの見方である。それぞれの I ポジションは声を持ち、それぞれの Me についての独自のストーリーを語るができる(ハーマンズ&ケンペン 2006 : 6)¹。

インフォーマントのなかでも、他者と比較できないほど衝撃の大きな経験をしている人は、同じ経験をした「他者」として誰かを指し示すことはできず、語りのなかで複数の I ポジションを移動しながら語っていた。それは、その経験をどうとらえればよいのかが自分のなかで定まっておらず、ひとつの I ポジションのみからその経験を語るができないからである。複数の I ポジションを移動しながら語っているため、自分の経験を統合したストーリーとして語るができていなかった。以上のことから、他者を参照して自分を位置づけるのではなく、混在する思いのなかで複数の I ポジションを移動しながら語る人は、まだ乗り越えの途中にあると考察した。

本研究の意義は、当事者自身による「被災者像」のとらえ方、「被災者」としての位置づけ方について、当事者の語りから分析することで「他者」の存在の重要性を示すことができた点にあるだろう。この点は先行研究では十分検討されていなかった点である。本研究は東日本大震災から 3 年目に行われた研究であり、被災者が震災を乗り越えていく一過程のデータに過ぎない。震災の経験は被災者によって多様であるため、乗り越えの過程についてより詳しく検討するのであれば、今後も継続的に被災者への聞き取りを行う必要があるだろう。

参考文献・URL

- Keiko Yamaguchi & Shinsuke Sakumichi, 2014, Encounters with Outsiders - The Impact of the Great Eastern Japan Earthquake on a Small Village - *Sociology in the Post-Disaster Society* pp.1-21
- 渥美公秀、2012、「第Ⅱ部 コミュニティの復興 第 6 章 災害復興過程に接続する災害ボランティア」
- 藤森立男・矢守克也、2012、『復興と支援の災害心理学—大震災から「なに」を学ぶか—』福村出版、pp.135-153
- 片岡佳美、2012、「集落の過疎・高齢化と住民の生活意識—島根県中山間地域での量的調査データをもとに—」山陰研究(第 5 号) pp.19-31
- 菅磨志保、山下祐介、渥美公秀編、2008、『災害ボランティア論入門』弘文堂
- 関谷直也、2012、「第Ⅲ部 社会と文化の復興 第 9 章 分断と格差の心理学」藤森立男・矢守克也編、2012、『復興と支援の災害心理学—大震災から「なに」を学ぶか—』福村出版、pp.196-217

¹ “I” と “Me” という用語はミードが自己の二つの主たる構成要素として見分けたものであり、“I” を「知者としての自己に相当し、純粹に主観的な方法でたえず経験を組織したり解釈したりする」自己、“Me” を「経験的自己」として区別している (ハーマンズ&ケンペン 2006 : 70)。

高森順子・諏訪晃一、2014、「災害体験の手記集の成立過程に関する一考察—「阪神大震災を記録しつづける会」の事例から—」実験社会心理学研究 54(1) pp.25-39

野田正彰、1992、『喪の途上にて』岩波書店

野田正彰、1995、『災害救援』岩波新書

ハーマンス&ケンペン著、溝上慎一・水間玲子・森岡正芳訳、2006、『対話的自己 デカルト／ジェームズ
／ミードを超えて』新曜社

岩手県 HP <http://www.pref.iwate.jp/index.html> 最終アクセス 2015年1月9日

野田村 HP www.vill.noda.iwate.jp/ 最終アクセス 2015年1月9日

野田村観光協会 HP www.noda-kanko.com/ 最終アクセス 2015年1月9日

野田村情報発信サイト 野田村復興計画 http://seesaawiki.jp/nodamura_koushiki/ 最終アクセス 2015
年1月9日

復興庁 HP <http://www.reconstruction.go.jp/> 最終アクセス 2015年1月9日